

台北市における日本統治時代遺産の現状に関する文化遺産学的研究

—市民によって利活用される建築遺産に注目して—

Cultural Heritage Research on the Current State of Japanese Colonial Heritage in Taipei City:
Focusing on Citizen Utilization of Architectural Heritage

李 詩涵
LEE SHIHAN

1. 序論

(1) 研究背景

台湾の日本統治時代(1895~1945 年)において、日本政府は欧米の近代的な都市計画制度や手法を取り入れ、台湾の伝統的な都市空間を大きく変革した。また、日本人が導入した建築様式、規範、技術は、台北市の街並みの秩序と建築の安全性を確立する上で重要な役割を果たした。この時代に建設された多様な建物の多くは今日までも都市景観の一部として残り、台北市の都市構造に深い影響を与えている。

ここ 20 年間では、日本統治時代遺産の保存および利活用への取り組みがさらに積極化し、社会的・文化的な評価も高まりつつある。台北市に現存する日本統治時代建築遺産は、一部が文化財として指定・登録されたが、文化的価値がまだ認識されていないものも多く、市民による自主的な利活用が続けられている建物も数多く存在する。そこで、文化財登録の有無にかかわらず、日本統治時代建築遺産がどれだけ残存し、どのような形で保存・活用されているのか把握する必要がある。

台北市の日本統治時代遺産に関する研究は多くの学術論文で取り上げられているが、市民による自主的な利活用に着目した研究は少ない。一方、文化遺産学の視点から、台北市大同区赤峰街に残る建築遺産の保存と市民による自主的な利活用の現状に注目した研究は管見の限りない。そこで、本研究では赤峰街を研究対象とする。

(2) 研究目的

本研究では、19 世紀末以降における地政的変化を経験した台湾の主要都市である台北市を対象に、日本統治時代建築遺産の自発的保存・利活用の現状を記録し、その課題を明らかにすることを目的とする。

(3) 研究方法

まず、書籍、学術論文、新聞、古地図などの文献資料を調査し、日本統治時代の台北における都市計画、台湾の文化財関連法規、保存および利活用の歴史、さらに赤峰街の産業、経済、交通、生活史について整理した。台湾の文化部の「国家文化資産網」を基にデータベースを構築し、台北市の日本統治時代遺産の情報を統計・分析した。また、日本統治時

代の土地謄本および建物謄本を参考に、赤峰街の歴史的建造物の建築年代を推測した。次に、台北市大同区赤峰街において 2 回の現地調査を実施し、日本統治時代建築遺産の外観や内装の特徴、用途、利活用の現状を把握した。さらに、赤峰街(光能里)の町長、赤峰街周辺の地元住民、歴史的建造物を活用して開店している店主を対象に、計 12 件の半構造化ヒアリング調査を行った。これにより、赤峰街における歴史的建造物の利活用の経緯と実態を記録するとともに、文化財登録に対する考えを明らかにした。

2. 台湾における日本統治時代遺産をめぐる歴史の変遷とその文化遺産化の現状

日本統治時代の台北の都市計画には、萌芽期(1895~1904 年)、展開期(1905~1935 年)、法制確立期(1936~1945 年)の 3 つの段階があった。日本統治時代の市区改正と都市計画は、都市環境を現代的な都市水準に整備しただけでなく、公共建設、建築規則、都市計画規則を確立した。そして、戦後も引き続き使用され、その後の台北市の都市開発に大きな影響を与えた。

台湾における文化遺産保護法「文化資産保存法」は 1982 年に施行され、日本統治時代遺産が注目されるようになったのは 1990 年代以降である。初期の文化財保護は中華文化に偏重し、日本統治時代遺産は軽視されたが、市民運動や本土化運動の影響で、文化保存がようやく政治的な立場から切り離された。

台北市において、日本統治時代遺産は 548 件あり、指定・登録文化財全体の 7 割以上を占める。文化財の地理的分布を見ると、日本統治時代の繁華街、商業区、帝国大学が位置した地域が最も多くの文化財がある。日本統治時代遺産の登録文化財 234 件のうち、街屋が最も多く、次いで木造の日本家屋住宅が多い。文化財として認定されていない日本統治時代遺産の多くは、現在も住宅や店舗として利用されている街屋であり、一般市民による利活用の割合が非常に高いと推測される。

3. 市民によって台北市の日本統治時代建築遺産の利活用の現状と課題

赤峰街は 1930 年代から庶民の居住地として発展し、「本土と東洋が入り交じった通り」と呼ばれた。

立地条件のため、社会層の区別が形成され、赤峰街は辺境のエリアとなった。戦後は中古自動車部品産業が発展したが、1990年代以降の市場変化や高齢化で衰退した。2010年代以降、文化・クリエイティブ産業が進出し、赤峰街は文芸的な地域として再生した。これにより、赤峰街の暗くて汚いイメージを打ち破り、古いものと新しいものが融合した路地風景を形成するに至った。

赤峰街には日本統治時代建築遺産が90棟あり、そのうち1棟は2023年に文化財として登録された擬洋風建築、残りの89棟は文化的価値を認められていない街屋建築である。特に赤峰街の中央部に密集している連棟式の街屋建築は顕著で、1940年以前から存在していたことが確認されている。利活用の現状を分析すると、店舗兼住宅が最も多く、全体の3分の1以上を占めている。

赤峰街の街屋建築には、1階の空間から完全に独立した階段やロフト、中庭の設置など、他地域の街屋建築ではあまり見られない特殊な建築形式がいくつかある。また、街屋の立面を観察すると、共通点はあるものの、欄干や庇、バルコニーの装飾帯、タイルなどの建築装飾のパターンは異なっている。

赤峰街は文化・クリエイティブ産業の進出により注目を集め、新旧が融合した独特の魅力を形成している。しかし、商業化やジェントリフィケーションの進行によってテナント料金が高騰し、小規模店舗や歴史的建造物の本来の姿が失われつつある。特に、近年の大規模ブランドの進出により、赤峰街独自の文化的特色が薄れている。2024年には土地利用規制違反を理由に多くの店舗が告発され、都市再開発の加速が懸念されている。また、日本統治時代建築遺産は赤峰街の魅力と認識されつつも、テナントに決定権がないことや文化的価値が高くないことを理由に文化財登録には否定的な意見が多い。歴史的建造物の価値が十分に評価されていない現状や、地域社会内での対立が懸念される。

4. 都市発展と建築遺産：存続と変化のせめぎ合い

赤峰街に残る日本統治時代建築遺産は、文化財保

護法の規制を受けないことで、民間の自由な発想による創造的な利活用が進められている。一方で、一部の店舗経営者や訪問者は、これら建築物の歴史的背景を認識していないことが多く、むしろ文化・クリエイティブ産業と歴史的建造物の融合がもたらす「ゆったりとした」「懐かしい」雰囲気魅了されている。これらの建築遺産の活用は、市民による自主的な運営と実行に基づき、店舗の理念や個性を自由に表現できる環境を作り出している。この結果、訪問者にとっても新鮮な体験となり、非チェーン店の個性的な小規模店舗が訪問者との対話を生む空間を提供しており、「リビングヘリテージ」として機能している。

しかし、赤峰街はジェントリフィケーションや都市再開発の危機に直面しており、一般的な商業地区へと変貌する懸念がある。建築遺産の所有者にとって文化財登録は選択肢の一つであるが、法規制の影響や維持費用の問題から十分なインセンティブがないのが現状である。また、地域内で共通認識を形成することが難しく、文化財登録や都市再開発のいずれも容易ではない。

5. 結論

日本統治時代建築遺産は、現在の台北市の都市景観と文化的アイデンティティに深い影響を及ぼしている。赤峰街では、市民の自主的な利活用が進んでいる一方で、文化財登録や保存に関する合意形成が十分に進んでおらず、ジェントリフィケーションや都市再開発による建物の喪失が懸念されている。そのため、歴史的建造物の価値を多くの人々に伝え、共感を広げることで、保存に向けた共通認識を形成することが求められる。現時点で保存に関する共通認識が形成されていない状況では、むしろ市民による自主的な利活用を維持することが、歴史的建造物の保存に資する可能性が高いと考えられる。また、これらの建築遺産を記録・保存するドキュメンテーションの取り組みも必要である。本研究が、台湾における日本統治時代遺産の利活用に関するさらなる研究の一助となることを願っている。

Abstract: This research explores the utilization of architectural heritage in Taipei's Chifeng Street area, where 90 Japanese colonial heritage remain, with only 1 designated as a cultural property. The shophouses in the area were built before 1940s, and are spontaneously preserved and utilized by the citizens. However, the area faces three key challenges: gentrification, the risk of urban renewal projects, and a lack of consensus regarding cultural preservation among the local residents. This research concludes that in the absence of a unified stance on preservation, the continued practical use of these heritage may be the most effective preservation strategy, alongside the need for documentation to safeguard their historical value.